

資料調査：上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の記事から(1939年) (上)

阿部, 吉雄
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/7153274>

出版情報：言語科学. 48, pp.49-61, 2013-02-13. The Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



資料調査： 上海のユダヤ人難民社会の教区新聞の記事から（1939 年） （上）

阿 部 吉 雄

はじめに

迫害によって国内のユダヤ人を半強制的に海外へ移住させるナチスドイツの政策は、1938 年 11 月 9 日から 10 日にかけての水晶の夜事件でその頂点に達した。同年 3 月に併合された旧オーストリアを含むドイツ全土におけるこの反ユダヤ人暴動により、多くのシナゴグやユダヤ人商店が破壊、放火、略奪された。また数万人のユダヤ人男性が逮捕され、強制収容所へ送られた。今やユダヤ人たちは必死に海外移住の道を探したが、彼らを歓迎する国はなかった。唯一中国の上海租界だけは移住のためのビザ等を必要としなかったため、1938 年 12 月から 1939 年 8 月までの約 9 ヶ月間、毎月 1000 人以上のユダヤ人難民が押し寄せた。その数は 1939 年 8 月時点で 1 万 5000 人以上と推定される。

言語も習慣もヨーロッパと大きく異なる上海において、ユダヤ人難民たちは上海在住のセファルディ系ユダヤ人社会とロシア系ユダヤ人社会ならびに海外、特にアメリカのユダヤ人社会からの支援を受けながら生活の再建に取り組んだ。他方で、難民たちは自らのユダヤ性とも向き合わねばならなかった。ヨーロッパにいた時、彼らの多くは自らをユダヤ人としてではなく、ドイツ人やオーストリア人として認識していたにもかかわらず、ユダヤ人であるがゆえに迫害を受け、上海ではユダヤ人同胞から支援を受け、同じ境遇のユダヤ人難民のコミュニティを基盤として経済的自立を目指していたからである。

上海への移住当初、ユダヤ人難民たちはセファルディ系ユダヤ人社会やロシア系ユダヤ人社会のシナゴグでの礼拝に参加していたが、言語や様式の違いもあり、難民たちはまもなく独自の礼拝を希望するようになる。試行的に行われた難民たちだけによるドイツ式の礼拝が成功した結果を受けて、上海在住の両ユダヤ人社会による支援組織「上海ヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会」（Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai / CFA）下の組織として 1939 年 7 月に誕生したのが「ユダヤの宗教的共同体」（die Jüdische Kultusgemeinde）（以下、「上海ユダヤ教区」、「ユダヤ教区」または「教区」）である。そして 11 月には上海ユダヤ教区は CFA から独立する。^{註1}宗教面に重点を置いた組織として発足した上海ユダヤ教区であるが、1941 年 12 月に太平洋戦争が始まり、上海が日本軍の支配下に置かれてからは、あらゆる面でユダヤ人難民社会を代表する唯一の組織となる。

本稿は、ひとまず発足はしたものの、まだ完全には独立していない上海ユダヤ教区が発行を始めた「ユダヤの宗教的共同体教区新聞」（das Gemeindeblatt der Jüdischen Kultusgemeinde）（以下、「教区新聞」）の記事の分析を通して、当時のユダヤ教区、ひいては難民社会に関する新

たな知見を得ようとするものである。^{註2}

1939年9月14日号（創刊号）

教区新聞はユダヤ人難民による他の新聞^{註3}と違い、ヨーロッパの戦況や国際政治に関するニュースは扱わず、上海での出来事の報道もユダヤ教区の活動に関係するものに限定されている。ユダヤ教区の会員に無料配布され、広告収入が運営の原資であった。^{註4}ユダヤ教区が編集を担当し、いずれも難民である弁護士 Max Nacht と出版者の Georg Laske が代表を務める The Shanghai Publishers が印刷・発行と広告管理を行った。^{註5}

この号には上海ユダヤ教区の設立に関与し、その後も重要な役割を演じる人々が挨拶の文章を寄せている。それらはいずれも、1939年9月1日にドイツ軍がポーランドへ侵攻して第2次世界大戦が始まったことに触れ、ナチス支配下の中欧に残っているユダヤ人同胞、特に家族や知人に思いを馳せている。

「緒言」（第1面57行）^{註6}において、上海ユダヤ教区の名誉会長である Georg Glass 博士は、教区の「会員と、さらに当地に移住した我々の信仰の同胞との、より密接で恒常的な接触を確立する努力において、ユダヤ教区は独自の教区新聞を発行することを決定し」、この新聞が上海ユダヤ教区の情報だけでなく、ユダヤやユダヤ教に関する知識を提供することにより、「教区の生活を豊かにし、我々の以前の故郷でそうだったような教区の生活を作ることに貢献する」よう期待している。中欧系ユダヤ人難民の教区の設立は、上海在住のセファルディ系ユダヤ人社会およびロシア系ユダヤ人社会から宗教的に独立することを意味する。上述したように、1938年12月以降上海に大量に流入したユダヤ人難民たちは、セファルディ系の Beth Aharon と Ohel Rachel の両シナゴグおよびロシア系の Oihel Moishe シナゴグの礼拝に参加していたが^{註7}、彼らの多くは慣れ親しんだドイツ式の礼拝を望んだのである。^{註8}宗教以外の面においてユダヤ人難民は依然としてセファルディ系ユダヤ人およびロシア系ユダヤ人による支援に依存していたため、Glass は「我々は当地（上海）でこれまで受け、なお受け続けている好意に対し、常に感謝を忘れないことを心に誓おう」と述べ、両ユダヤ人社会への配慮を示している。

Glass は「会長の挨拶」（第1面19行）も書いており、教区新聞に対して「政治にうつつを抜かさないように（それは性格を害する）」と呼びかけている。このことから、ユダヤ教やシオニズムを別にすれば、ユダヤ教区および教区新聞は特定の主義主張を広めることを目的とせず、上海のユダヤ人難民全体をまとめることを目指しているのが分かる。

「Paul Komor 博士から教区へ」（第1面45行）では、ユダヤ人難民を支援するもう1つの組織「ヨーロッパ系難民救援国際委員会」（International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC）の責任者で、1898年から上海に在住し、キリスト教に改宗したハンガリー系ユダヤ人実業家の Paul Komor 博士が、難民たちの「多くは絶望の間近にいるが、日々の委員会活動から彼らを知る者は、そしていかに多くの人々が物質的拠り所を失っているだけでなく、何よりも精神的・宗教的支えを緊急の支援としてとても必要としているかを知る者は、この新たな宗教コミュニティが専念すべき主要課題が何であるかが分かる」と、教区設立に理解をしている。一方、IC と並ぶ支援組織でより主流派の、そしてこの時点ではまだユダヤ教区の上部組

織である CFA の代表者だったセファルディ系のユダヤ人大富豪 D. E. J. Abraham や、ロシア系ユダヤ人の重鎮ラビ Meier Ashkenazi などの宗教上の正統派による寄稿がないことから、教区設立が両ユダヤ人社会との関係に影を落としていることを伺わせる。

「私の年賀！」(第 1～2 面 87 行)における教区ラビ Winter 博士^{註9}の「私の祝福は私たちの教区の狭い範囲だけでなく、それを超えて、私たちと同じ運命を分かち、同じ気持ちと感情に満たされている 1 万 5000 人の移住者にも向けられる」という言葉から、当初からユダヤ人難民の大半が教区の会員になっていたのではなかったことが分かる。

Winter はさらに「新年の祝祭のためのトーラーおよび預言書の章」(第 3 面 138 行)で、ハガルの追放や息子イサクを神への生贄にしようとするアブラハムの話の引いて、「苦しみが最も大きいところは、神が最も近くにいます」とユダヤ人難民を励ますとともに、「私たちユダヤ人は自らの義務を果たさねばならない。それは仕事をし、絶望しないということである！そしてとりわけ、私たちの青少年のために道を開いてやることである。彼らは私たちの慰めであり、私たちの未来のための希望である。彼らは私たちの喜びであり、誇りでなければならない」と言い、若い世代に配慮する姿勢を示している。^{註10}

ユダヤ教区設立の中心人物である Leopold Steinhardt^{註11}は業務執行理事という肩書きで「教区新聞への私の挨拶」(第 2 面 79 行)を寄稿し、教区の設立には「正当な批判と、しばしば十分に正当でない批判」、「拒絶や無関心」、「克服すべき障害が多数」あったと述べ、また「教区を設立するという私の計画の最初から、この教区に独自の新聞を与えることも私は固く意図していた」と、教区新聞の発行も彼の発案によることを明らかにしている。

教区新聞の創刊号が発行された 1939 年 9 月 14 日はユダヤ暦の 5700 年 Tischri 月(1 月)1 日にあたる。弁護士 Albert Trum^{註12}は「年の変わり目—時代の変わり目！」(第 2～3 面 136 行)と題し、「新年 5700 年で私たちのユダヤ暦では新しい世紀が始まる」と、ユダヤ人にとっての新しい年の特別な意味を強調するとともに、1 年前のローシュ・ハッシャーナー(新年)の祭を自分たちはまだヨーロッパで家族や友人と祝っていたこと、その数週間後には 1938 年 11 月 9～10 日の水晶の夜事件で「神聖な場所(シナゴグ)が廃墟と化」し、数万人のユダヤ人が「数週間または数ヶ月間個人的自由を奪われ」て強制収容所に入れられ、「その後、運がよければ、まったく不確かな未来へ向かって、まったく見知らぬ世界へ歩み出すことが許された」と、釈放と引き換えの半強制的な出国だったことを回想している。

創刊号には関係者の挨拶以外にも、「ローシュ・ハッシャーナーの祝祭礼拝」(第 4 面 56 行)(9 月 13～15 日)および「安息日礼拝」(第 4 面 16 行)(9 月 15 日(金)、16 日(土))の案内が掲載されている。9 月 13 日の夕方や 14 日の朝の礼拝についての予告があることから、名目上の発行日 9 月 14 日より前に発行・配布されたと考えられる。また礼拝の場所として、Broadway 劇場、Beth Aharon シナゴグ、Ward Road シナゴグ、上海ユダヤ人学校講堂、Seymour Road シナゴグが挙げられている。Broadway 劇場は、ユダヤ人難民の多くが居住した蘇州河以北の虹口・揚樹浦地区に位置する映画館である。^{註13}Beth Aharon シナゴグは、セファルディ系ユダヤ人富豪の Silas Aaron Hardoon が 1927 年にセファルディ系ユダヤ人社会に寄贈し、蘇州河以南の共同租界にあった。^{註14}Ward Road シナゴグとはロシア系ユダヤ人社会の Oihel Moishe

シナゴグであり、Broadway 劇場の近くに位置する。^{注15} 上海ユダヤ人学校は 1931 年にセファルディ系ユダヤ人社会が蘇州河以南の共同租界に作り、セファルディ系だけでなくロシア系の子弟も、そして中欧系ユダヤ人難民の子弟も移住の初期には通っていた。^{注16} Seymour Road シナゴグは 1920 年にセファルディ系ユダヤ人富豪 Sir Jacob Elias Sasson の遺産で建てられた Ohel Rachel シナゴグであり、上海ユダヤ人学校に隣接していた。このように、誕生したばかりの上海ユダヤ教区はまだ自前のシナゴグを持っていなかった。^{注17} 各礼拝の案内には「説教者」(ラビ Winter 博士、E. Cohn 説教師、Max Ehrenberg、Zeitlin 博士、Kurt Radt、Max Nacht) 以外に「合唱指揮者」の名前 (Antmann (ママ)、David Hes、Heinrich Wartenberger、Martin Epstein、Fleischer、Bernhard Lehr、Glass、Max Warschauer、Kurt Radt、Harry Hauptmann) が記載されていることから、合唱が行われていたことが分かる。^{注18} 合唱を備えたドイツ式の礼拝を難民たちが望んだのも、上述のように上海ユダヤ教区設置の理由のひとつだった。

創刊号にはさらに「ベルリンの教区へ」(第 4 面 76 行) として、ベルリンとウィーンのユダヤ教区へ送った上海ユダヤ教区の設立を報せる書簡を掲載している。^{注19} そこには上述の名誉会長 Glass 博士と業務執行理事 Leopold Steinhardt の他に、Ludwig Braun、Gerhard Gottschalk、Hugo Kaufmann、Kurt Marx 博士、Arnold Rossmann、Oscar Weiss、Salomon Zilbersain らの名前が記されている。^{注20}

1939 年 9 月 29 日号 (第 3 号)

創刊号がユダヤ暦の新年にあたるローシュ・ハッシャーナーの時期であったのに対し、この第 3 号はローシュ・ハッシャーナーの祝祭で始まる 10 日間の終点であるヨーム・キップールの祭に時期的に近い。前日の日没からこの日の夕方まで断食をして贖罪を行うとともに、和解の日でもある。弁護士の Albert Trum は第 1 面すべてを埋める「祝祭と祝祭の間で」(第 1 面 171 行) と題する文章において、上海のユダヤ人難民社会について「妬み、争い、暴利、搾取、詐欺が幅をきかせていないだろうか? 愛に対して憎悪で、信頼に対して良心を欠いた裏切りで応えることがしばしばではないだろうか? 寡婦や孤児の権利を屈従させることがしばしばではないだろうか? 経験のない人々からそのなけなしの金を奪うことがしばしばではないだろうか? 善行を受けながら、それへの感謝を忘れてはいないか? また、隣人の苦難に対して頑なであることもしばしばではないだろうか? 金持ちや所有者は拒絶する時、自分もいつか他人の援助を必要とするかも知れないことを考えるだろうか? そして彼が与える時、いつも傲慢や慢心から離れた純粋な心で与えているだろうか?」とその連帯意識の低さを戒める。

教区ラビの Winter 博士は「幕屋の象徴」(第 2 面 130 行) で、ヨーム・キップールが喜びの祝祭であることから、職業や日常生活そして宗教活動に単なる義務としてではなく、喜びをもって全力で打ち込むことを求めている。それによって、ユダヤ人に運命づけられた放浪の途上の粗末な住まいにおいても幸福と満足を感じることができる、と過去のユダヤ人の歴史と現在の上海での難民生活とを重ね合わせている。

業務執行理事の Leopold Steinhardt は「ユダヤ教区の任務」(第 2~3 面 197 行) において、上海のユダヤ教区が自らの任務と考えている 4 つの領域を説明する。1 番目の「礼拝」では「私

たち中欧出身のユダヤ人にとって、礼拝をこれまで慣れ親しんだ形式で、「恒常的に実施されるようにするために努力を怠らない」とする。さらに「ドイツ語を話す移住者の結婚および埋葬」に「独占的に責任を負う」。2番目の「文化的活動」として、ユダヤ文化とユダヤ人芸術家の奨励を挙げている。3番目の「青少年への支援および社会福祉」では、まず年長の若者への「スポーツの鍛錬」と「ユダヤ性を意識した教育」により、彼らが「ますます失われているように思われるユダヤの精神」で満たされることを目指す。1939年11月に正式に開校する「上海ユダヤ人青少年協会学校」(Shanghai Jewish Youth Association School)を始め、難民子弟の基礎教育は成果を上げつつあったが、15歳以上の若年者は高等教育も職業訓練も与えられず、失われた世代になりつつあったからである。^{註21}。社会福祉の分野では、教区の高齢で体が弱った会員や病気の会員のための活動をすでに始めているという。その後、特に太平洋戦争中は福祉部門の活動が上海ユダヤ教区の最も重要なものになる。4番目の「経済的支援と法律相談」に関しては、「教区の会員のために、専門家が特定の日に対応する経済的および法的相談部門を設立する」としている。これらのことから、上海ユダヤ教区は単なる宗教的団体にとどまらず、発足当初からユダヤ人難民社会の自治組織を目指していたことが分かる。

9月29日号でも発行日当日(金)と翌日(土)の朝の礼拝の案内「5700年 Chel Hamoed Sukkothの安息日のユダヤ教区の礼拝」(第3面7行)が掲載されており、実際の発行・配布が表向きの日付よりも前であることが分かる。これは週刊新聞であることと相まって、教区新聞の目的が報道ではなく情報提供・広報であることを示している。礼拝の場所として Seymour Road (Ohel Rachel) シナゴーク、Museum Road (Beth Aharon) シナゴーク、Ward Road (Oihel Moishe) シナゴークの3つが挙げられている。9月14日号の案内で示された Broadway 劇場や上海ユダヤ人学校講堂は、通常の日礼拝ではなくローシュ・ハッシャーナーの祝祭礼拝のような特別の機会に、おそらく普段より多い参加者を受け入れるために使用されたのであろう。

ユダヤ人難民で作家の Martin Hausdorff^{註22}は「シナゴーク音楽の変遷」(第3～4面168行)という論稿で、ソロモンの寺院に起源があるシナゴーク音楽の再興・発展の歴史におけるキリスト教やイスラム教の影響、優れた先唱者や作曲家たちの貢献、西洋音楽との関係について概説している。

ユダヤ人難民の Max Wittenberg^{註23}の「直立不動！」(第3面18行)という詩が掲載されており、その内容は神を信頼して運命を耐え忍べというものである。

「支援を！」(第4面59行)では、上述の Leopold Steinhardt による「ユダヤ教区の任務」で言及された青少年への支援に関連して、ユダヤ人青少年たちを「1日の、または1週間のうち、少なくとも一定の時間、赤裸々な生存をかけた戦いが行われる空間的、心理的、精神的狭所から連れ出してやる」目的で、「工作の授業、スポーツ、職業教育、音楽演奏、教訓、ユダヤの伝統の保存、そして何よりも楽しい集い」を実施するための募金を呼びかけている。その後開校される上海ユダヤ人青少年協会学校(S. J. Y. A.)にはユダヤ人難民の Wilhelm Deman 教授^{註24}を責任者とする S. J. Y. A. Junior Club が併設され、生徒たちを対象に製本、マニキュア、手仕事、体操、ファッションデザイン、調理、パン焼き、フランス語、郵便切手収集、簿記基礎、社交ダンスと礼儀作法、デッサンと絵画、ラジオ組み立て等のプログラムを提供した。商業コースでは生

徒たちが S. J. Y. A. Junior Club 貯蓄銀行を運営した。^{注25}

「文化生活より」(第4面25行)という記事では、ピアニストの Hans Baer が Kadimah^{注26}と国際赤十字から依頼され、ユダヤ的な音楽を生み出したユダヤ人作曲家たちの作品を10月12日に American Women's Club において上海で初めて紹介すると伝えている。このコンサートには Irene Seidl-Margolinski (ソプラノ)、Henry Margolinski (指揮者)、Adolf Wittenberg 教授 (バイオリン)、Hersch Friedmann (ヘブライ語およびイディッシュ語の歌曲) も出演する。^注

27

記事「上海と私たち」(第4面26行)は9月25日に催されたコンサートのタベの報告と、10月7日と8日に行われるレビュー(軽喜劇)の紹介で、いずれも場所は Broadway 劇場である。前者は初めて室内管弦楽団が結成され、またソリストとして Louis Levinee (バス)、Hans Baer (ピアノ) が出演したと報じている。後者は上海における難民の生活を風刺的に描いたもので、難民の中の俳優や音楽家(Erwin Engel、Desiderius Gruen、Leo Schoenbach、Walter Friedmann、Olga Hajegg、Jenny Rausnitz、Max Bukofzer-Brandt、Hersch Friedmann、Max Guenther、Fritz Heller、Martin Jacobi、Walter Lewens、Harry Walden) によって製作・上演された。^注

28

この号では、教区新聞の編集が上海ユダヤ教区によることが明記されている。(第5面7行) また広告の受付場所として、ユダヤ教区の事務所や印刷所の The Shanghai Publishers 以外にも9の個人や店舗が挙げられている。(第6面21行) さらに、住所を変更する教区の会員に「教区新聞を遅滞なく受け取りたい方は、新しい住所をすぐに本紙の発送部までお知らせください」と呼びかけている。(第4面7行) 住宅事情が劣悪な上海で、ユダヤ人難民たちは少しでも環境や条件のましな住居があれば、頻繁に引越しを行ったようである。

「告示」(第4面8行)として、「ここ数日起こったいくつかの非常に不快な出来事に基づき、私たちの信仰上の仲間以下のことをお願いしたい。Broadway 映画館の前で集まること、および歩道で数人が集まることを控えてください。他の住民との摩擦を避けるためです」と、ユダヤ人難民と(おそらく)中国人住民の間にトラブルが発生したことを伝えている。このような要請は、船で上海に到着した難民たちに対して、支援組織の CFA の代表者からも行われていた。

この号では「私たちの教区からの家族の知らせ」(第4面51行)として、2人の新生児の誕生(8月1日生まれと9月14日生まれ)がその名前、両親の氏名、住所とともに紹介される。さらに8組の結婚がやはり夫婦の氏名、住所とともに、また12人の死亡(7月26日～9月23日)が本人の氏名、住所、没年月日とともに示されている。すべてのユダヤ人難民が教区の会員になっている訳ではないので網羅的ではないだろうが、上述の Leopold Steinhardt による「ユダヤ教区の任務」で述べられているように、いわゆる戸籍管理をユダヤ教区が行おうとしていることが伺える。

ユダヤ人難民が上海租界で職を得る上で最大の障害は英語だった。それゆえ「英語集中コース」(第5面11行)では、ユダヤ教区が開講する初心者向けと中級者向けの集中コースの受講者を募集している。

「シムチャト・トーラー子ども祭」(第5面20行)では、ダンス場の庭とホールで開催する子

ども向けの祭を案内している。「私たちの会員の子どもたちにはココア、ケーキ、その他のお菓子が振舞われ、陽気な数時間の間、シムチャト・トーラー祭の楽しみに参加してもらいます」。その他には、Broadway 劇場および上海ユダヤ人学校での礼拝の際の落し物のお知らせがある。(第4面8行)

1939年10月13日号(第5号)

第1面の「教区の祝祭礼拝」(第1面168行)では、弁護士 Albert Trum がローシュ・ハッシャーナーとそれに続く新年の様々な祝祭の礼拝について詳しく報告している。彼は Leopold Steinhardt が、ユダヤ人難民自身によるシャブオットの祭日の礼拝に始まるユダヤ教区設立へ向けた動きの中心人物だったことを明らかにする。そして「私たち(難民)の慣れ親しんだ礼拝を行うことが、私たちの間の宗教的、精神的な結合のための重要な要素を形成する」と言う。Trum によれば、虹口・揚樹浦地区および共同租界、フランス租界のユダヤ人難民のために行った祝祭礼拝には「圧倒的な人数が押し寄せた」。また、それに続くヨーム・キップールなどの祝祭礼拝には青少年の参加が許され、例えば Broadway 劇場では「青少年が彼らののぼりや旗で空間を埋め、彼らが聖なるトーラーの周囲に儀仗衛兵として立ち、それから突然、私たちの新たに生まれつつあるユダヤ民族の国歌ハティク ヴァを若い喉から歌い始めた」と雰囲気を与えている。さらに9月14日号や9月29日号で文章を書いていた教区ラビの Winter 博士の退任を伝える。

9月29日号と同様、この号でも「英語集中コース」(第1面14行)の受講者を募集している。虹口・揚樹浦地区でのコースは参加者が集まれば10月中旬にも始まり、共同租界とフランス租界に住むユダヤ教区の会員のためのコースも準備しているという。

ジャーナリストの Manfred Rosenfeld ^{註29}は「頭を上げて!」(第2面179行)という記事で、ローシュ・ハッシャーナーの祝祭が上海のユダヤ人難民にとって特別の意味を持ったと解説する。「ユダヤ人移住者が特に密集して居住する虹口には、静けさが訪れた。ユダヤ人の店舗は閉店し、所有者や従業員は自分の住まいやハイムへ帰った。まもなく夕食が取られた。そして礼拝が始まる前の最後の数時間、厳かな期待に満ちた厳肅さが地域全体の上に注がれた。」第2次上海事変による戦闘で荒廃した虹口・揚樹浦地区にユダヤ人難民が住みついて店舗を開き、リトル・ウィーンやリトル・ベルリンと呼ばれるヨーロッパ風の街並みが生まれていた。Rosenfeld はドイツでユダヤ人が礼拝へ行く時には、キリスト教徒の「皮肉な微笑みを招かないよう、左右へ目を走らせる必要」があったと言う。「多くの国民、宗教、人種が隣り合って暮らしているこの真の世界都市(上海)」が持つ宗教的寛容は、ユダヤ人の生活と仕事の最も重要な前提である。ユダヤ人難民にとって第2に重要なのは組織であり、ユダヤ教区を通じて知り合った人間同士が互いに経済的に協力し、生計を立てることができるようになる。第3は難民自身の自助努力であり、1万5000人の難民のために各支援組織ができるのは宿泊と食事の世話までで、それ以上の生活再建には忍耐と時間が必要である。Rosenfeld は有能な者がまず自立し、他の人々を引き上げてくれることを希望している。

「教区が支援します!」(第2面49行)では、教区へ寄付した5人の氏名と金額が紹介されている。さらに病人、老人、栄養不足の会員に昼食を提供するユダヤ教区の活動でこれまでに269

食の成果があった他に、72 パイントの牛乳、21.40 ドル相当の食料品、靴 2 足、背広 1 着の現物支給を行ったことも報告している。また、支援の申請は教区事務所を直接訪問するのではなく、書面で行うよう求めている。申請書を基に教区の保護司が審査するという。人間関係や情実を排することが目的であろう。

「ユダヤ教区の安息日 Rausch Chaudesch Marcheschwan の礼拝」における礼拝案内（第 3 面 7 行）は、この号でも発行日当日と翌日の朝のものであり、実際の発行は 10 月 13 日より前であることが分かる。シナゴーグも 9 月 29 日号と同様、Seymor Road (Ohel Rachel)、Museum Rroad (Beth Aharon)、Ward Road (Oihel Moische) の 3 つが挙げられている。Karlheinz Sober という新たなラビの名前が示されている。^{註30}

「告知」（第 3 面 20 行）では、次号から青少年向けのコーナーを設置することを予告する。担当者は自らを「Kurt 叔父さん」と称しているが、9 月 14 日号で業務執行理事の 1 人として挙げられた Kurt Marx 博士であろうか。

「私たちの教区からの家族の知らせ」（第 3 面 23 行）では 1 組の結婚、9 人の死亡（9 月 26 日～10 月 9 日）が紹介されている。後者のうち 5 人については、住所だけでなく「Chaoufoong 病院にて」という記載もある。虹口・揚樹浦地区に数ヶ所存在した最も貧しい難民約 2500 人用の収容施設「ハイム」には診療所が置かれていたが、この記事から Chaoufoong Road ハイムにはより本格的な病院があったと推測される。^{註31}

「文化生活より」（第 3 面 41 行）では、1) ユダヤ人難民の芸術家たちによって毎週行われる文化活動の一環として、「私たちと青少年」という講演の夕べが室内管弦楽団による演奏を伴って開催されたこと、2) ハンガリーのユダヤ人作家 Franz Molnar (1878～1952 年) の喜劇『城の中の遊び』が、「Thespi-Karren」という上海ですでに有名になっている俳優たち (Olga Hajegg、Walter Berg、Karl Bodan、Fritz Heller、Harry Walden その他)^{註32}の団体により 10 月 17 日に Broadway 劇場で上演されること、3) 難民の Siegfried Fred Erdstein^{註33}による子ども向けの舞踏教室が、Alcock ハイムで毎週日曜と木曜と開催され、指導料の一部はミルク基金に寄せられることについて報告している。

「室内管弦楽団 1939」（第 3 面 27 行）という記事では、9 月 29 日号で簡単に触れられたユダヤ人難民による室内管弦楽団の設立総会が 10 月 5 日に開催されたことを報じている。初年度は指揮者にオーケストラの創設者である Leo Fuchs が、業務執行者にやはり創設者である K. P. Loewenberger と弁護士 of the Albert Trum が、代議員に Joe Glash、Armin Saphir、Willy Rosner が、出納管理者に Wilhelm Kapise が選ばれた。^{註34}予約を基礎として、冬季全体を通して公演を続ける。

「E」の署名がある「ノアとアブラハム」（第 4 面 157 行）では旧約聖書の重要人物の 2 人を比較し、不道徳な時代に他の同時代人から離れて孤独の中に敬虔さを守ったノアに対し、隣人と全人類への愛を持ち、同時代人との交流により彼らを神へと導いたアブラハムをより高く評価する。そこには助け合い社会を目指すユダヤ教区の方針が認められる。

この号からオーストリアのユダヤ人作家 Joseph Roth (1894～1939 年) の小説『ヨブ。ある平凡な男の話』の連載が始まる。（第 4 面 72 行）

「ミルク基金への寄付リスト」(第5面10行)では4人の寄付者の氏名、住所、金額を紹介している。そのうちの2人はハイムの住人である。

「上海と私たち」(第5面16行)では9月29日号で予告し、Broadway劇場で10月7日と8日に上演されたレビュー(軽喜劇)が紹介される。「上海と私たち」がこの10幕物の芝居の題名だったことが分かる。2日間とも満員で、切符を購入できなかった人々のために14日(土)に3回目の公演が行われる。

(続く)

注

1. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (1976). S. 411 f.
2. 本稿で分析する教区新聞は、ドイツ国立図書館のプロジェクト「亡命新聞・雑誌のデジタル化。1933～1945年のドイツ語による亡命定期刊行物」(Projekt “Exilpresse digital. Deutsche Exilzeitschriften 1933-1945”)から著者が入手した1939年9月14日号(創刊号)、9月29日号(第3号)、10月13日号(第5号)、10月20日号(第6号)、11月17日号(第10号)、12月22日号(第15号)、12月29日号(第16号)である。
3. ユダヤ人難民の中には数十人のジャーナリストがいた。彼らは上海でも活発に活動し、1939～1941年にユダヤ人難民を読者層とするドイツ語による日刊(朝刊および夕刊)・週刊・月刊新聞約10紙を発行した。
4. そのため広告スペースは紙面の約半分を占め、日刊新聞の『Shanghai Jewish Chronicle』などと変わらない。拙稿「資料調査：上海のユダヤ人難民新聞『Shanghai Jewish Chronicle』(1939年)の記事から」、『言語文化論究』(26)2011年、九州大学大学院言語文化研究院、155～170頁。
5. 1943年5月以降中欧・東欧系ユダヤ人難民が居住するよう指定された虹口・揚樹浦地区を管轄する提籃橋分局特高股が1944年8月に作成した『外人名簿』において、Max Nachtは「37歳、弁護士、無国籍難民」と記載されている。Georg Laskeは、1939年11月に上海のThe New Star Companyという出版社から発行された『Emigranten Adressbuch』(移住者住所録)に「ベルリン出身、出版者」と、『外人名簿』には「57歳、セールスマン、ドイツ難民」と記載されている。
6. 教区新聞は3段刷り6ページの構成である。記事によって字のサイズや語間・行間のスペースの大きさに差があり、また2段抜き・3段抜きの見出しの場合も同じ1行と数えるため、本稿で示す行数は記事の大まかな分量を表しているにすぎない。
7. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 410.

8. David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 412.
9. Kranzlerによると、教区の最初のラビである Winter は 1939 年 10 月の彼の最初の礼拝を行ってまもなく、アメリカへ向けて上海を後にした。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 412.
10. ユダヤ人難民の子弟のための「上海ユダヤ人青少年協会学校」(Shanghai Jewish Youth Association School) は 1939 年 11 月に正式に開校した。拙稿「上海のユダヤ人難民の子弟への学校教育」、『言語文化論究』(21) 2006 年、九州大学大学院言語文化研究院、34 頁。
11. Leopold Steinhardt は『外人名簿』に「57 歳、無職、ドイツ難民」と記載されている。
12. Albert Trum は『移住者住所録』に「弁護士／ユダヤ教区事務総長 (Generalsekretaer)」と、『外人名簿』に「42 歳、弁護士、ドイツ難民」とある。『移住者住所録』では教区の責任者たちの住所が皆「50/28 Ward Road」になっており、ここに教区事務所が置かれたことが分かる。
13. 教区の設立以前に、ユダヤ人難民自身によるシャブオットの祭日の礼拝が Broadway 劇場で行われた。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 411.
14. 存在した場所にちなんで、Museum Road シナゴークとも呼ばれる。1000 以上の座席を有するが、セファルディ系ユダヤ人社会のほとんどは 1937 年の第 2 次上海事変の際に共同租界の西端へ移り、Ohel Rachel シナゴークで礼拝を行うようになっていたため、1939 年当時 Beth Aharon シナゴークは使用されていなかった。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 410.
15. ロシア系ユダヤ人社会も 1937 年の第 2 次上海事変の際にフランス租界へ移住し、虹口・揚樹浦地区に残っていたロシア系ユダヤ人はわずかだった。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 440.
16. 裕福なセファルディ系ユダヤ人の子弟は外国人（特にイギリス人）用のパブリックスクールに通った。拙稿「上海のセファルディ系ユダヤ人」、『言語文化論究』(20) 2005 年、九州大学大学院言語文化研究院、46 頁。
17. 上海ユダヤ教区の最初のシナゴークは 1941 年後半に虹口・揚樹浦地区の MacGregor Road に作られた。Marcia Reynders Ristaino: „Port of Last Resort“. Stanford, California (Stanford University Press) 2001. S. 306.
18. Max Ehrenberg は『移住者住所録』に「ベルリン出身、宗教教師」と、『外人名簿』に「56 歳、先唱者、ドイツ難民」とある。Kurt Radt は『移住者住所録』に「ハム出身、教師」と、『外人名簿』に「34 歳、教師、ドイツ難民」とある。Max Nacht は『外人名簿』に「37 歳、弁護士、無国籍難民」とある。David Hes は『移住者住所録』に「ロストック出身、先唱者」と、『外人名簿』に「52 歳、先唱者、ドイツ難民」とある。Heinrich Wartenberger は『移住者住所録』に「プレスラウ出身、先唱者」とある。Bernhard Lehr は『移住者住所録』に「ウィーン出身、音楽家」と、『外人名簿』に「54 歳、獣医 (?), ドイツ難民 (?)」とあ

- る。Max Warschauer は『移住者住所録』に「ボイテン出身、先唱者」とあり、その住所の「255 Route Cohen」はフランス租界の高級住宅地に位置する。『外人名簿』には「33 歳、主任先唱者、ドイツ難民」とある。Harry Hauptmann は『移住者住所録』に「ベルリン出身、作曲家」と、『外人名簿』に「63 歳、セールスマン、ドイツ難民」とある。
19. ベルリンおよびウィーンはドイツおよび旧オーストリアの首都であることから、そのユダヤ教区へ書簡を送ることは自然なことだが、上海のユダヤ人難民のうちドイツ出身者の 56.0%がベルリン出身であり、オーストリア出身者の 95.8%がウィーン出身であることから、ベルリンおよびウィーンと上海のユダヤ教区の関係が強いことが分かる。拙稿「資料調査：上海のユダヤ『移住者住所録』(1939)」、『言語文化論究』(17) 2003 年、九州大学大学院言語文化研究院、142～144 頁。
20. Ludwig Braun は『移住者住所録』に「グラーツ出身、商人」とあり、その住所の「587 Bubbling Well Road」は蘇州河以南の共同租界の中心部に位置する。Gerhard Gottschalk は『移住者住所録』に「ベルリン出身、公務員」と、『外人名簿』に「45 歳、従業員、ドイツ難民」とある。Hugo Kaufmann は『移住者住所録』に「ベルリン出身、商人」と、『外人名簿』に「63 歳、質屋店主、ドイツ難民」とある。Kurt Marx 博士は『移住者住所録』によると、ユダヤ教区の他に CFA および IC の委員でもあり、また「ケルン出身、医師」とある。その住所の「803 Bubbling Well Road」は蘇州河以南の共同租界の中心部に位置する。Arnold Rossmann は『外人名簿』に「52 歳、従業員」とあり、その住所の「138 Zangyang Lu」は自力で部屋を借りることができない貧しい難民用の収容施設「ハイム」である。Salomon Zilbersain は『移住者住所録』に「ウィーン出身、歯科医」と、『外人名簿』に「47 歳、歯科医、ドイツ難民(?)」とある。
21. 1941 年 9 月、ポーランド系ユダヤ人難民 Chaim Rozenbes が ORT (Obschestvo Remeslenovo i. zemledelcheskovo Trouda / 手仕事と農業のための協会) の上海支部を開き、14～60 歳の生徒に対して 6 ヶ月間無料で訓練が行われた。1943 年夏、ユダヤ人職人たちがギルド (職人組合) を結成し、ギルドと ORT が協力して作った補足学校では、親方たちの下にいる 14～21 歳の見習い (徒弟・実習生) が、自分の選んだ領域において、実地の仕事だけでは得られない理論的知識に関する授業および一般教養の授業を受けることができた。拙稿「上海のユダヤ人難民社会における職業教育」『言語科学』(46) 2011 年、九州大学大学院言語文化研究院、4～5 頁。
22. Martin Hausdorff は『移住者住所録』には「作家」と、『外人名簿』には「43 歳、無職、ドイツ難民」と記載されている。
23. Max Wittenberg は『移住者住所録』に「プレスラウ出身、商人」とあり、その住所の「138 Ward Road」はハイムの場所である。『外人名簿』には「47 歳、無職、ドイツ難民」とあり、その住所の「66 Ankuo Lu」もまたハイムの場所である。
24. Wilhelm Deman は『移住者住所録』に「ウィーン出身、語学教師」と、『外人名簿』に「49 歳、教師、ドイツ難民(?)」と記載されている。
25. Joan R. Deman: 'Bildungsarbeit in Shanghai'. In „Zwischenwelt“. (18) 2001. S. 44.

26. Kadimah は Nathan Birnbaum (1864-1937) や Peretz Smolenskin (1842-1885) らが 1882 年にウィーンで創設した最初のユダヤ民族主義学生団体。上海ではすでに 1916 年にロシア系ユダヤ人が Kadimah を組織していた。中欧系のユダヤ人難民シオニスト組織 AZO “Theodor Herzl” (Allgemeine Zionistische Organization) は 1939 年 9 月 9 日に設立された。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 63 u. 377.
27. Hans Baer は『移住者住所録』に「ベルリン出身、ピアニスト」とあり、その住所の「153 Route des Soeurs」はフランス租界の高級住宅地に位置する。Henry Margokinski は『移住者住所録』に「ベルリン出身、指揮者」とあり、その住所の「500 Rue Lafayette」はやはりフランス租界の高級住宅地に位置する。『外人名簿』には「42 歳、音楽教授、ドイツ難民」とある。Irene Seidl-Margolinski は『外人名簿』で Henry Margokinski の妻であることが分かり、「45 歳、音楽教師、ドイツ難民」とある。Adolf Wittenberg 教授は正しくは Alfred Wittenberg 教授と思われ、『外人名簿』に「64 歳、音楽教師、ドイツ難民」とある。Hersch Friedmann は『移住者住所録』に「プレスラウ出身、歌手」とあり、その住所の「66 Alcock Road」にはハイムがあった。『外人名簿』には「47 歳、無職、無国籍難民」とある。難民の中の音楽家については、拙稿『上海のユダヤ人難民音楽家』、『言語文化論究』(22) 2007 年、九州大学大学院言語文化研究院、29～40 頁。
28. Broadway 劇場は本来映画館であるため舞台の奥行きが狭く、演劇には不向きだった。Hans Baer については注 27 を参照。Erwin Engel は『移住者住所録』に「ウィーン出身、俳優」と、『外人名簿』に「63 歳、無職、ドイツ難民」と記載されている。Desiderius Gruen は『外人名簿』に「50 歳、石鹸工場、ドイツ難民」とある。Leo Schoenbach は『移住者住所録』に「ハレ出身、指揮者」とある。Walter Friedmann は『移住者住所録』に「プフォルツハイム出身、商人」と、『外人名簿』に「34 歳、商人、ドイツ難民」とある。Jenny Rausnitz は『移住者住所録』に「バーデン出身、女優」とある。Max Bukofzer-Brandt は『外人名簿』に「37 歳、俳優、ドイツ難民」とある。Hersch Friedmann については注 27 を参照。Fritz Heller は『移住者住所録』に「ウィーン出身、俳優」とある。Martin Jacobi は『外人名簿』に「32 歳、店舗オーナー、ドイツ難民」とあり、その住所の「150 Hok San Lu」にはハイムがあった。
29. Manfred Rosenfeld は『移住者住所録』に「プレスラウ出身、ジャーナリスト」とあり、その住所の「138 Ward Road」はハイムの場所である。『外人名簿』には「58 歳、ジャーナリスト、ドイツ難民」とあり、その住所の「150 Hoksan Lu」もまたハイムの場所である。
30. Karlheinz Sober は『移住者住所録』に「プレスラウ出身、ラビ」と、『外人名簿』に「27 歳、従業員、ドイツ難民」と記載されている。
31. Chaoufoong Road ハイムには隔離病棟やレントゲン室があった。拙稿「上海のユダヤ人難民社会における医療」『言語科学』(45) 2010 年、九州大学大学院言語文化研究院、86 頁。
32. Walter Berg は『移住者住所録』に「ベルリン出身」、『外人名簿』に「42 歳、無職、ドイツ難民」とある。Karl Bodan は『移住者住所録』には「Karl Bodanetzky、ウィーン出身、俳

優」とある。Fritz Heller については注 28 を参照。

33. Siegfried Fred Erdstein は『移住者住所録』に「ウィーン出身、ペディキュア師」と、『外人名簿』に「52 歳、バレエ教師、ドイツ難民 (?)」とある。
34. Leo Fuchs は『移住者住所録』に「ベルリン出身、ピアニスト」と、『外人名簿』に「49 歳、教師、ドイツ難民」と記載されている。Joe Glash は『移住者住所録』に「ベルリン出身、音楽家」とある。Armin Saphir は『移住者住所録』に「ウィーン出身、ピアノ調律師」とある。Willy Rosner は『移住者住所録』に「Wilhelm Rosner、グラーツ出身、音楽家」と、『外人名簿』に「Wilhelm Rosner、48 歳、音楽家、ドイツ難民」とある。Wilhelm Kapise は『移住者住所録』に「ウィーン出身、公務員」と、『外人名簿』に「57 歳、従業員、ドイツ難民」とある。

本稿は JSPS 科研費 24520806 の助成を受けたものです。